

# 宮沢賢治の書簡「あなたはむかし…」の位置

——親友・保阪嘉内宛書簡の再検討から——

大明 敦

はじめに

一 書簡「あなたはむかし…」について

二 先行研究の比較

(1) 小沢俊郎氏の見解

(2) 保阪庸夫氏の見解

(3) 栗原敦氏の見解

(4) 三神敬子氏の見解

(5) 問題の所在

三 書簡から見える両者の動向

四 書簡「あなたはむかし…」の位置

おわりに

宮沢賢治の保阪嘉内宛書簡の一つに「あなたはむかし」の書き出して始まる、大学ノート四頁に書かれたものがある。この書簡には日付の記入がなく、従来は大正十年七月下旬に書かれたものと推定され、宮沢賢治と保阪嘉内が同時期に信仰上の対立から訣別に至ったとする説の根拠とされてきた。しかし、『新校本宮澤賢治全集』第十五巻の編集方針にも示されているように、この書簡を大正十年のものと見ることに疑問も存在する。

本稿は、この書簡の時期推定に関する先行研究を整理・検討し、それぞれの意図や問題点を探ると同時に、宮沢賢治の保阪嘉内宛書簡を再検討することによって、この書簡のあるべき位置（発信時期）について論じたものである。

## はじめに

宮沢賢治が盛岡高等農林学校時代の親友・保阪嘉内に宛てて書いた書簡は、現存するものが七三通ある。これらの書簡は大正十四年六月二十五日付の一通を除いて大正五年から十年までのものであり、嘉内は大正十二年八月三十日にそれらの手紙を整理し、同じく『アザリア』の誌友である小菅健吉・河本義行の書簡と共にスクラップブックに貼り込んで大切に保存していた。この書簡が保阪庸夫・小沢俊郎編『宮沢賢治 友への手紙』（筑摩書房、一九六八年。以下『友への手紙』と略す）として刊行されたことによつて、それまでは賢治と寄宿舎で同室であつた演劇好きな学生、あるいは共に同人誌『アザリア』を作つた仲間といつた程度でしかなかつた保阪嘉内の存在が賢治研究者の間でクローズアップされるようになった。

ところが、同書の刊行によつて賢治と嘉内の二人が大正十年七月下旬に訣別したという小沢俊郎氏による説もまた同時に世間に流布することとなり、やがてはそれが定説となつていった。小沢氏が訣別の根拠としているものに、大正十年七月下旬のものと同定されてきた宮沢賢治の書簡がある。この書簡は「あなたはむかし」という書き出しで始まつていることから、本稿では便宜上これを書簡「あなた

はむかし」と呼ぶことにしたい。

筆者もまた、かつては二人の訣別を信じていた者の一人であつたが、この書簡の实物を目にした時、小沢氏の説への疑念がわき上がり、拭い去ることはできなくなつた。そこで、訣別の根拠とされてきた資料を検討し直してみると、「訣別」は事実ではなく単なる説の一つにすぎないという結論に至つた。本稿は、こうした見地から、小沢俊郎氏によつて宮沢賢治と保阪嘉内の訣別の根拠とされて以来、長い間大正十年七月下旬のものと推定されてきた宮沢賢治の書簡「あなたはむかし」が書かれた時期について、他の書簡との関連性を中心に検討することにより、本来この書簡が位置すべき場所について改めて考えてみようとするものである。なお、特に注記のない限り、文中の書簡番号は『新校本宮沢賢治全集』第十五巻のものである。

### 一 書簡「あなたはむかし」について

保阪嘉内が大正十二年八月にスクラップブックに貼り込んだ宮沢賢治の書簡は、おおよそ年代順に配列されていた。「おおよそ」と記したのは葉書は同じ頁にまとめて貼り込む傾向があつたことと、若干の錯簡が認められるためである。本稿で問題とする書簡「あなたはむかし」は、大学ノートの一丁（四頁）分を綴じからはずして二つ折りにし、

その内面の小口側に糊を付けて袋綴じにしたもので、所有者である保阪庸夫氏によればスクラップブックの「大正八年初頃の書簡の間に貼らずにあった」、あるいは「元々、賢治篇の第一六頁に挟み込まれていた。前後頁には32 33と36 39 45の三通ずつが貼られていた」という（引用文中の書簡番号は『友への手紙』のもので、『新校本宮澤賢治全集』では89 93 94と102 146 158）。このようにスクラップブックに貼らずに挟み込まれていたことが、この書簡の書かれた時期について諸説を生む一因になっている。

袋綴じになっている書簡の外側の文面の最後には、「若し今までの間でも覚束ないと思はれるならば次の二頁は開かんで置いて下さい」と書き添え、糊付け部分の開封に覚悟を求めている。その全文は次の通りである。

### （外側）

あなたはむかし、私の持つてゐた、人に対してのかなしい、やるせない心を知つて居られ、またじつと見つめて居られました。  
今また、私の高い声に覚び出され、力ない身にはとてもと思はれるやうな、四つの願を起した事をも、あなた一人のみ知つて居られます。

まことにむかしのあなたがふるさとお出づるの歌の心持また夏に岩手山に行く途中誓はれた心が今荒び給ふならば私は一人の友もなく自ら

と人にかよわな戦を続けなければなりません。

今あなたはどの道を進むとも人のあわれきを見つめこの人たちと共にかならずかの山の頂に至らんと誓ひ給ふならば何とて私とあなたとは行く道を異にして居りませうや。

仮令しばらく互に言ひ事が解らない様な事があつてもやがて誠の輝きの日が来るでせう。

どうか一所に参らして下さい。わが一人の友よ。しばらくは境遇の為にはなれる日があつても、人の言の不完全故に互に誤る時があつてもやがてこの大地このまゝ寂光土と化するとき何のかなしみがありませんか。

或はこれが語での御別れかも知れません。既に先日言へば言ふ程間違つて御互に考へました。然し私はそうでない事を祈ります。この願は正しくないかもしれませんが。それで最後に只一言致します。それは次の二頁です。

次の二頁を心から御読み下さらば最早今無限の空間に互に離れても私は惜しいとは思ひますまい。

若し今までの間でも覚束ないと思はれるならば次の二頁は開かんで置いて下さい。

### （内側）

あなたは今この次に、輝きの身を得数多の通力をも得力強く人も吾も菩提に進ませる事が出来る様になるか、又は涯無い暗黒の中の大火の



ついでに『校本宮澤賢治全集』第十三巻の校異に《備考》としてまとめられている。

「或はこれが語での御別れかも知れません。既に先日  
に言へば言ふ程間違つて御互に考へました。」とある  
のは、保阪の『国民日記』の七月十八日の欄に「晴／  
宮沢賢治／面会来」と書かれたのが斜線で抹消されて  
いることと対応するものとみて、本書簡は七月下旬筆  
と推定する。賢治の信仰の熱情が極度に高まり、保阪  
に入信を激しくせまったもののついにそれが決裂に終  
つたので、思いつめた賢治が信仰のため友情の存続を  
賭けて本書簡を書き送ったものであろう。

詳しくは後述するが、小沢氏のこうした見解は一九八〇  
年代には定説となつていった。『校本宮澤賢治全集』の年  
譜（第十四巻所収）に、大正十年七月十八日の保阪嘉内の  
日記に触れて「書簡196から考えて、面会したものの、両者  
には宗教論や各自の行動営為について批判対立があり、気  
性の激しい保阪が賢治との訣別を覚悟したもののように思  
われる」と記し、続けて「七月下旬 保阪にあて一八日争  
論の決着を求め、信仰と友情の切迫した一文を書く。（書  
簡196）」と記していることも、小沢氏の説が既に『校本宮  
澤賢治全集』の編者らの共通理解を得ていることを示すも  
のであろう<sup>(6)</sup>。

さらに一九九〇年代以降、二人の訣別は一般には定説の  
域を超えて、それがあたかも事実であるかのように受け取  
られている感さえある。那須真知子脚本の『我が心の銀河  
鉄道』（東映配給、一九九六年）、菅原千恵子著の『満天の  
蒼い森』（角川書店、一九九七年）、江宮隆之著の『二人の  
銀河鉄道―嘉内と賢治』（河出書房新社、二〇〇八年）な  
ど映画や小説の中で二人の訣別の場面が実に取りアルに描か  
れているのはその一例といえる。

しかし、本当にこのように考えてよいものであろうか。

『校本宮澤賢治全集』第十五巻（書簡）の編集に際し、  
栗原敦氏はこの書簡の表記や用字を検討した結果、大正七  
年の時期不明書簡と位置づけ、書簡102aの番号を与えて同  
年末に配置している（同時に書簡196は欠番とされた）。し  
たがって『校本宮澤賢治全集』をテキストとする以上は、  
小沢氏のような大正十年七月の「訣別」は根拠を失い、  
説としては成り立たなくなるはずである。ところが、『新  
校本宮澤賢治全集』第十五巻が一九九五年に刊行されて一  
五年経つ今日においても、二人の「訣別」を当然のことの  
ように記した著作は後を絶たない<sup>(7)</sup>。このことは、どのよう  
に考えればよいのであろうか。

そこで本稿では、まず小沢俊郎氏をはじめとした諸氏の  
この書簡に対する主だった見解を概観し、その上でこの書

簡のあるべき位置について論じてみることにしたい。

## 二 先行研究の比較

### (1) 小沢俊郎氏の見解

『友への手紙』では、年ごとに「参考資料」と題した解説が付されている。編者の一人である小沢俊郎氏は、大正十年の「参考資料」の中で、この書簡と保阪嘉内が七月十八日の日記で「宮澤賢治／面会来」と中央に書いた頁に抹消と思われる斜線を引いていることと関連づけて、「信仰心火と燃えた賢治」が「古き心の友保阪嘉内を同じ信仰の道連れにしよう」と激しく働きかけ「たが不調に終わり、ついに「信仰のため友情を賭け」て七月下旬に書簡で呼びかけたものの、保阪は「信仰へ入ることなく、同時に交友も前のようにはつづきにくくなってしま」い、保阪の日記がその後空白になっているのは「この心の友との訣別は堪えがたかった」ためと記している。これが小沢氏による宮沢賢治と保阪嘉内の二人が、大正十年七月に訣別したという説のストーリーである。

さらに小沢氏は「宮沢賢治、保阪嘉内との交友」（『国語と国文学』九五卷一二号、一九六八年十二月）の中で、次のように記している。

この気迫の籠った激しい手紙を書いたとき、賢治は信仰に友情を賭けたのだ。友情が強いものであればある程、生き方の上での合一をも求め、友情は友情信仰は信仰と割り切ることができなかつたのだ。若さの故もあつたろうが、求道心の激しさがあいまいな点に留まることを許せなかつたのであろう。その上、前述のような賢治の一方的理解の上にそれらが考えられた面もあるとすれば、嘉内としては賢治の期待にこたえることは不可能となつてしまふ。敬愛する父と宗教問答で争つて父子の溝を深めた賢治は、今また信じ許し合つた友と別れねばならなかつた。

右のように小沢氏は解釈しているが、小沢氏の推定の根拠は『友への手紙』一七五頁にこの書簡の注として記した「この手紙には年月日がない。スクラップ・ブックには大正七年の末から八年初の頃の書簡の間に置いてあつた。しかし、これだけ激しい内容のものがその頃のものと考へがたい」という、きわめて主観的なものでしかない。また、小沢氏がこの書簡と関連づけて宮沢賢治・保阪嘉内の「訣別」のストーリーを描く材料となつた保阪嘉内の日記の記述についても、小沢氏とは全く異なつた読み取り方が可能である。

小沢俊郎氏の説が有力視され、定説となつていく上で、



恩田逸夫氏や萬田務氏がこの説を支持したことは大きな推進力になっていっているように思われる。とりわけ、恩田氏が「賢治の友人たち」（『国文学 解釈と鑑賞』三八卷一五号、一九七三年十二月）、「宮澤賢治における大正十年の出郷と帰郷」（『明治薬科大学研究紀要』六号、一九七六年九月）、「書簡の文体」（『国文学 解釈と教材の研究』二三卷二号、一九七八年二月）などで小沢氏の説を補強すると同時に二人の訣別を繰り返して述べてきたことは、定説化に大きな役割を果たしたのであろう。萬田氏も早い時期から小沢氏の訣別説を支持してきた研究者の一人で、『人間宮澤賢治』（桜楓社、一九七三年）では『友への手紙』を引用して二人の訣別の状況やこの書簡の意味するところについて記している。

また、賢治の作品と二人の訣別とを関連づけて解釈しようとしたものに菅原千恵子氏の『宮澤賢治の青春』（宝島社、一九九四年）がある。菅原氏は書簡「あなたはむかし……」の全文を引用し、「大正十年七月十八日、再会した二人の間に何があったかはもはや明らかである」という。さらに、この「何があったか」を賢治が描いたものが『図書館幻想』や文語詩「〔われはダルケと名乗れるものと〕」などであり、そこに登場するダルケ（文語詩ではダルケ）という人物と保阪嘉内を同一人物と見做し、「おれとダルケ

の別れの状況は、賢治と嘉内のそれと、ぴったりと重なる」と述べている<sup>⑩</sup>。しかし、『図書館幻想』も「〔われはダルケと名乗れるものと〕」も創作された作品である以上、事実をそのまま記したものと見ることは疑問を感じる。

## （2）保阪庸夫氏の見解

『友への手紙』のもう一人の編者である保阪庸夫氏は、書簡「あなたはむかし……」について、「如何なる天意の下に――保阪嘉内宛書簡について」（『宮澤賢治全集』第十一卷月報、一九六八年八月）の中で、『友への手紙』に二人が訣別したと記されたことについて、

寧ろ大人びてからの二人は互に七年三月の手紙の時点に戻り、これからの二十年三十年を音なく一心に勉強しようとする誓い、又十年七月の手紙の様に、異なる境遇の中での実践を通して再び相会う事を確認し合ったに違いないと考えます。（中略）此処に誌した考えには資料としての裏付けがないので、一先づ二人の間は大正十年代に冷却したものと致しました（以下略）

と述べている。また、「我が友賢治―遺品は呟く」においても、『友への手紙』では手紙第70を訣別状と規定したが、弾劾と誘引、脅迫と哀願、硬軟入り交じった文章からは、むしろ賢治懸命の折伏の念が感じられる」と書いている<sup>⑪</sup>。こ

とも、書簡の解釈や二人の訣別については小沢俊郎氏と異なる見解を有していたことを示すものである。

このように保阪氏は書簡「あなたはむかし…」の内容については小沢氏とは異なった見解を示しながらも、この書簡を最終的に大正十年七月下旬のものとした理由は、同氏の「友への手紙」残照<sup>12)</sup>に探ることができる。保阪氏はこの中で父・嘉内が大切にしてきた賢治書簡の公開を迫られたことに対する逡巡や懊悩、さらには出版社との確執などを述べている。編集方針についても「現代の権威者が、賢治の筆癖や既知の伝記にのっとった定説に従って手紙を編集するとしましょう。嘉内は交際の真最中に、近い記憶に従ってスクラップしました。どちらが真相、即ち賢治に近いでしょう。本当の編集者は嘉内以外にありえませんが」と「対峙格闘した」という。この部分を読む限りでは、保阪氏はスクラップブックにおける順序に従って書簡を配列すべきことを主張しているように見える。しかし、書簡「あなたはむかし…」にその考えが反映されなかったのはなぜか。その答えは、次のように記されている。

結果的にはクライマックスになったノート二枚の手

紙の扱いには苦慮いたしました。もともと大正八年頃の書簡の間に貼らずにあったものを、大正十年七月十九日以降の或る日と推定して大移動を敢行したものと

です。

書中で賢治は二人の志向の齟齬を嘆き、法華経帙依がなければ嘉内との友情がこれ以上保てないと激しく切なく迫っています。近頃此の手紙の位置について有り難い提言があります。後世半可通の賢しらで原型に変更を加えるのは、本質を損うことにはなりはせぬかと、私共自身が十分悩み抜いたところです。確かに書誌学的には更に追究する必要があります。当時入営中の嘉内への賢治からの面会申し込み状、面会し論争した当日の嘉内日記、後に河本義行の同人誌「砂丘」に掲載された嘉内の手記を参照すると、現位置にあるべき心理的必然性があります。

つまりは、スクラップブックでの位置や、栗原氏が指摘するような表記などの点も熟慮したが、保阪氏としてはそれ以上に「心理的必然性」を重視して書簡「あなたはむかし…」を大正十年七月下旬のものとして位置づけたと理解できる。

### (3) 栗原敦氏の見解

書簡「あなたはむかし…」を大正十年の賢治の他の書簡と比較すると、筆跡が明らかに異なっている。この書簡の筆跡は、大正七年ごろの賢治の筆跡とよく似ているのであ



る。書簡の展示を見て、このことを感じられた方は少なくないであろう。こうした点に着目して検討を重ねた結果、栗原敦氏は『新校本宮澤賢治全集』第十五巻では、書簡「あなたはむかし…」に102aの番号を与え、大正七年の時期不明書簡として同年末に配置した。同時に、従来この書簡に与えられていた106という番号は欠番とされた。

栗原氏の見解は、『新校本宮澤賢治全集』第十五巻の刊行に先立って発表された「表記と用字、あるいは時期推定書簡存疑」『新校本宮澤賢治全集』書簡集編集作業から――（『宮沢賢治研究 Annual』五号、一九九五年九月）に詳しく述べられている。栗原氏は、書簡「あなたはむかし…」に見られる促音表記と、平仮名「な」の字体（字形）に注目した。すなわち、「この書簡の促音の表記が『小書き』でないことは疑問の余地がな」く、それが「促音には一貫して『小書き』が用いられる大正十年の状況との矛盾」があること、この書簡に使われている平仮名「な」の字形が大正八年頃までのものと大正十年ごろのものとは異なっており、「な」の事例でも大正八年春以前の書簡との共通点を持つこの書簡は「大正十年の字形・字体、表記の実態と大きくずれている」ことを示している。こうした検証の結果から、栗原氏は「106書簡を大正十年とすることには問題がありすぎるといわざるをえない」とし、「スク

ラップブックの全体を通して錯簡が多いとは思われない」ことから「明らかな反証がないかぎり、出来るだけ『貼込』の位置や順序と矛盾の少ない時期を選ぶほうが、ここでは、より望ましいのではあるまいか」と考え、併せて用箋が大正七年六月二十六日付の書簡75と同じものであることを示し、「いずれをとつても、106書簡の大正十年という推定は説得力を失う結果になっている」と結論付ける。さらに、この書簡の発信時期について、

とはいえ、これまで確かめてきた事柄によつても、106書簡の発信時期を何月と断定的に指定することは、なかなか難しい。いまは、『校本宮澤賢治全集』の時期不明書簡の配置の仕方にならつて、大正七年の時期不明書簡として年末に配置し、今後の検討にゆだねるのがよいのではないかと考えている。書簡集のここに配置することは、保阪嘉内スクラップブックの「貼込」位置とも矛盾しないし、七年のもっと早い時期の可能性も示唆できる。あるいはやや遅れて八年初めの可能性も探られうる。

と記している。きわめて客観的で説得力もある見解であり、その要点は『新校本宮澤賢治全集』第十五巻校異篇にも《備考》として記されている。しかし、今もって栗原氏の説が広く一般に受け容れられていないのは不思議なこと

ある。その理由も探られねばなるまい。

#### (4) 三神敬子氏の見解

保阪家に保存されてきた賢治書簡の存在を小沢俊郎氏に伝え、小沢氏と共に『友への手紙』の編集にも携わった三神敬子氏は、その後『賢治研究』に「『宮澤賢治 友への手紙』をめぐって」と題する研究ノートを二一回にわたって連載している。『賢治研究』八一号(二〇〇〇年四月)に掲載されたその第一七は「訣別の時―書簡70の位置づけとともに―」と題して、書簡「あなたはむかし…」の書かれた時期と二人の訣別の時期について書かれたものである。三神氏は、まず賢治の書簡から大正十年二月十八日付の書簡18を最後に嘉内への国柱会に対する勧誘の文言がなく、交信もしばらく途絶えていることから、これを二人の「訣別の時」と考え、『友への手紙』に記された同年七月下旬を「訣別の時」とする見解に異議を呈する。その上で、書簡「あなたはむかし…」がスクラップブックに貼り込まれなかった理由を、この書簡を「素直に受け入れることが出来なかった」ために「通常の書簡入れの中には入れず、他のどこか別の処に置いた」ものが、大正十二年八月に他の書簡を「スクラップブックに貼った後に出てきた」ので「大正七年、つまりこの手紙を受け取った年の最後の

ところにはさんでおいたのではないか」と推測する。

さらに、三神氏はこの書簡を、賢治が大正七年三月二十日前後と推定される書簡50を書いた後、「ほとんどの時をおかず、おさまらない感情をさらに伝えるように、言い切れなかつたものを、そのもどかしさから付け足すように、言いつぎて納得出来ず、さらに重ねて思いを伝えようとして、泣きながら書いた手紙」であると考える。文中の「既に先日言へば言ふ程間違つて御互に考へました」は、「嘉内が除名を知つて、急遽盛岡にもどつた、三月十五日以後、三月二十九日までのいずれかの日」に二人が会つて話をしたことを指すと推定できることなどを例に、書簡「あなたはむかし…」は書簡50と51の間、すなわち「大正七年三月二十日以後、三月二十九日の間に位置する」もので、「さしずめ書簡50(a)ということになるうか」と結論づけている。しかし、これだけの覚悟を求める書簡を送つてすぐ、何事もなかつたかのように「こゝへも春が来ました」という三月二十九日付の書簡51を送つていことはどのようなに理解すればよいのであろうか。それほど早急に賢治の気持ち平静になるとは思えない。さらに嘉内の側に立てば、突然に除名という思いもよらぬ処分を受け、気が動揺してはたはずである。そんな時に賢治と信仰について争論などできるであろうか。嘉内に賢治の言葉を考える余裕ができる

までには、少なくともさらに一か月を要する。四月三十日付の書簡59に「私の古い手紙などをお読み下さったりありがたうございます」とあるが、この「古い手紙など」の中に書簡50も含まれているのではなからうか。

さらに三神氏は書簡の時期推定に関して、

また、大正七年以降、二人の長い交友のどの時期をさがしても、二人が直接会って話し合ったと思われる他の時が見当らないことによるのだが、同時に、二人の間にこのような激しい議論のわきおこるような状況も見当たらないからである。

と記しているが、筆者はその「他の時」の存在を考えている。

#### (5) 問題の所在

以上のように書簡「あなたはむかし…」をめぐってはさまざまな見解があるが、傾向として考えれば、小沢俊郎氏以来連綿と続いている大正十年七月下旬説は心情的なもので、大正七年末ごろとする栗原氏の説はそれと好対照なまでに客観的なものといえる。心情的な見解は人口に膾炙しやすいが、根拠を考えると妥当性に疑問が生じる。栗原氏も小沢氏の見解について次のように記している。

「言へば言ふ程」は「文字でなく」、「向い合つて」

のことだととれるとするなど、目配りよく精密に組み立てられた追跡だが、ひとつだけ気掛かりなのは、当該書簡をここに置く理由が求めねばならなかった原因である。(中略) かりに、大正十年の七月十八日に、確かに宮沢賢治と保阪の面会があり、推測されるような意味の斜線を必要とする状況が生じたのだとしたとしても、それは当該書簡をそこにおかねばならなかった場合に、不自然ではないだろうということを示しただけなのである。

では、書簡「あなたはむかし…」を大正七年のものとする栗原氏の見解はどうであろう。実に客観的に論証され、論旨も明快で、反論の余地はないかのように感じられる。しかし、『新校本宮沢賢治全集』第十五巻が刊行されて五年を経た今日にあつても、栗原氏の見解を無視するかのようになり、この書簡を根拠とした大正十年の「訣別」を当然のことのように記した著作が後を絶たないのはなぜであろうか。あたかも欠番となった書簡196が亡霊のように存在しているかのようなのである。

その理由は、おそらくは栗原氏の見解がきわめて客観的なものであるために、逆に読者の心情的な部分に十分浸透していかず、これを大正十年七月下旬と見る読者・論者の先入観を払拭するには至っていないからではなからうか。

このことは保阪庸夫氏の、検討を重ねた末に「心理的必然性」からこの書簡を大正十年七月下旬のものとしたという見解とも通じる。この書簡を大正七年三月下旬のものとする三神敬子氏の説も、大正七年の中でこの「心理的必然性」を探ったものと見ることができよう。

これらのことを考慮に入れるなら、大正七年末かそれに近い時期に賢治と嘉内が再会し、しかもそこに保阪氏の言う「心理的必然性」が感じられるならば、そこそがこの書簡の位置すべき場所としてふさわしいのではなからうか。栗原氏も考えているように、この書簡の発信時期が保阪嘉内のスクラップブックでの位置とほぼ一致するとすれば、大正七年末ごろから前後三か月程度の範囲に、それにふさわしい時期を必ず見出すことができるはずである。このように仮定して、大正七年三月から八年春にかけての宮沢賢治と保阪嘉内の動向を改めて書簡から探ってみよう。

なお、三神敬子氏のこの書簡を大正七年三月のものとする説については、筆者もかつてそれに近いことを考えたことがある。それは、文中で何度も「この経」という言葉が出てくることから、この書簡は「赤い経巻」こと島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』を賢治が嘉内に贈った際に添えたものではないかというものであった。しかし、内側の文中に「経(この経)を信ずるか又は一度この経の御名をも聞

きこの経をも読みながら今之を棄て去るかのみに依つて定まります」とあることから、嘉内が「この経」を手にしてから相当の間を置いて書かれたものと思われるため、この考えは採らなかつた。

### 三 書簡から見える両者の動向

大正七年三月十三日、保阪嘉内は盛岡高等農林学校から突然に除名処分を受けた。春休みで帰省中であつた嘉内に賢治が除名を報じたのが書簡49である。これを見た嘉内は急遽盛岡に戻り、除名の撤回を求めべく教授たちを訪問したが願いは叶わず、虚しく盛岡を去ることになる。賢治は研究生として学校に残り、同時に嘱託として学校の実験指導補助や稗貫郡の地質調査の仕事に従事する。

嘉内は明治大学に籍を置きつつ、農科大学への進学を目指して東京で受験勉強を開始するが、六月十六日に嘉内の母・いまが逝去する。賢治は嘉内を慰めると同時に法華経への帰依を勧め、書簡を相次いで送る。書簡74・75・76がそれである。しかし、賢治と嘉内の間に信仰に対する齟齬があつたことは七月ごろの賢治の書簡の所々からうかがえる。たとえば七月十七日消印の書簡78で「あなたは何でも何かの型に入らなければ御満足ができないのですか」、七月二十五日消印の書簡83で「私がさつぱりあなたの御心持

を取り違えてみるとか云ふことも本統でせう」といった文言には双方の考えに食い違いがあったことがうかがえよう。六月三十日、賢治は肋膜炎の診断を受け、七月には関教授に退学を申し入れ、八月には実験指導補助の嘱託を解かれていた。健康に不安があり、将来の職業に対しても展望が開けず、精神的に不安定になっていたことも一因かも知れないが、既に根本的なところで二人の間に信仰に対する考えに相違があったのではないかと思われる。この間、『アザリア』の終刊号となった第六号が河本義行の尽力で六月二十五日に刊行されている。

九月、嘉内は早稲田大学に入学した。賢治が九月二十九日付の書簡88で「先以て今回は東京御研学の事と決定相成り候段奉大賀候」と書いていることは、明治大学に入学したことを指していること従来は考えられてきたが、四月に入学した学校のことを九月の末になって取り上げるのは時期的にそぐわない。そこで、嘉内の河本義行宛書簡を見ると「かくて目下東京にあれど学校はどこへも行かず（但し早稲田大学生の名義）、心の趣く俣に勉強致し居り候」という言葉が出てくること<sup>①</sup>から、このころ明治大学を辞めて早稲田大学に入学したことがうかがえる。そうであれば、書簡83aの「学校は面白うございますか」は、「東京御研学の状況をさらに詳しく訪ねたものであり、書簡88の後に位

置すべきものであることになる。栗原敦氏は、『校本宮澤賢治全集』では十月ごろと推定され、書簡92の番号が付与されていたこの書簡を、『新校本宮澤賢治全集』では八月ごろと推定して書簡83aの位置に移している（従って92は欠番）が、この点に着目する限り栗原氏の判断には疑問がある。ちなみに、スクラップブックでのこの書簡の貼込位置は、書簡88の次である。

その後、十一月に至って嘉内は郷里に帰って営農することを決意する。十二月初め頃と推定されている書簡93で賢治が「この度は又御決心の程誠に羨しく、御祝申し上げます」と述べているのはそのことを意味している。十一月の末頃、嘉内は東京の下宿を引き払って郷里の駒井村（現・山梨県韭崎市）に戻るが、「農学を学んで村に帰り、村長となつて故郷を模範村にする」という大志を抱いて入学した盛岡高等農林学校やそこで出会った賢治を初めとした友たちへの思いは忘れがたいものであったようである。このころ『ひとつのもの』と題した歌稿ノートに「何故ぞ／杜陵はいまに／忘れさらず／秋冷ふかく／身にしみ渡る」など、盛岡への思いを綴った歌を記している。嘉内は営農が本格化する前に、盛岡や花巻を訪問しておこうと計画したものらしい。十二月十二日消印の河本義行宛嘉内書簡に「僕も来年一月十日前後に盛岡へ往く、是非その場合ふ事



が出来る様に盛岡に居ては下さらんか」とあるのは、<sup>16</sup>そうした計画を伝えたものであろう。同時に、この計画は賢治にも伝えられたはずである。書簡93に「私もそちらへ参りたいのですがとても宅へは願ひ兼ねます。御出で下さるならば最ありがたく存じます」とあるのは、そのことへの返信と思われる。

しかし、この計画は頓挫する。妹トシの入院により賢治は母親と一緒に上京してトシの看病に当たることになったためである。十二月三十一日付の書簡102で「あなたと御目にかかる機会を得ませうかどうですか 若し御序でもあれば 日時と場所とを 御示し下さい」と記しているのは、妹の看病のために上京したことによる突然の思いつきではなく予定を変更して東京で会うことを提案したもの、すなわち一月に岩手で会おうという最初の再会の計画は断念せざるを得なくなった代わりに東京で再会しようと考えたものと見るのが妥当であろう。

もしそうであれば、二人は大正八年の一月十日前後に東京で再会したのではなからうか。残念ながらそのことを実証する資料は今のところ見つかっていないが、少なくとも二人が東京で再会し、相違する意見をぶつけあったらしいことは、大正九年七月二十二日付の書簡106に「東京デオ目ニカ、ツタコロハコノ實際ノ行路ニハ甚シク迷ツテキタノ

デス」とあることからうかがえる。賢治と嘉内が東京で再会したとすれば、賢治がトシの看病で上京していた大正七年の十二月二十七日から八年三月三日までの二か月ほどの間に限定でき、賢治のいう「行路」とは模造宝石の製作などの職業的なことではなく、その前に「タシカニワレワレハ ロデコソ云ハネ同ジ願ヲタテタデス」と書いているところから信仰に関することであろうと推測できる。

こうしたことを手がかりに考えれば、最も可能性が高い時期は大正八年一月十三日から十五日までの三日間ではあるまいか。賢治は毎日トシの病状を伝える書簡を父宛に送っており、一月十一日には書簡110に「可成一日二便と致すべく候」とまで書いているにもかかわらず、十四日・十五日の二日間<sup>17</sup>は父宛に書簡を送っていない。また、一月十三日付の書簡112は帯京中の父宛書簡の中で唯一箇条書きで書かれているが、それは精神的な動揺が影響したためかも知れない。当然、時期的にも一月十日前後という当初の盛岡・花巻訪問の予定と大きく離れてはいない。

また、この時期に賢治と嘉内の間で意見の対立があったことも書簡からうかがえる。十二月十日頃のもの<sup>18</sup>と推定されている書簡94で「私があなたの力を知らない」と云ふのは（中略）あなたはあなたの信ずるところをおやりになったらいかがですか」と批判的に記していることや、書簡102で



は自分から再会を呼びかけながらも「母の前では一寸こみ入った事は話し兼ねます」と書いていることなどから、二人の間に避けることのできない意見の対立があったことが感じられる。

再会后、二人の間にはしばらくの断絶があったようである。次に両者が書簡を交わすのは大正八年四月ごろと推定され、書簡14で「永々と御無沙汰致しましたが」と賢治が無沙汰を詫びているように嘉内との間に少なくとも数か月の間交信がなかったことがうかがえる。一方、河本が一月十九日消印の嘉内宛書簡で「御来盛の程如何相成り候や」といい、さらに一月三十日消印の嘉内宛書簡では「三月には是非盛岡に来られよ」と記しているところから、嘉内は一月十日前後に盛岡に行く計画を十九日以前に中止し、三十日までに三月に盛岡を訪問すべく計画の変更を知らせていることがわかる。嘉内は実際に、三月八日から十二日にかけて盛岡に旅行し、盛岡では河本ら同級の友人や馴染みであった芸妓らと再会したことを『盛岡紀行』と題した手帳に記している。にもかかわらず、この手帳の記録を見る限り、旅の途中で賢治を訪問した形跡はない。このことは訪問しづらい雰囲気や当時の二人の間にあつたためではなからうか。書簡14は、それから約一か月を経て発信された嘉内からの書簡に対する返信と思われる。

#### 四 書簡「あなたはむかし…」の位置

このように書簡を見る限り、少なくとも宮沢賢治と保阪嘉内の二人が大正九年七月以前に東京のどこかで再会したことは明白である。しかも、その時には二人の間に争論があり、その内容が信仰にかかわるものであつたことは想像に難くない。その時期を宮沢賢治・保阪嘉内・河本義行の三人の書簡から探るならば、大正八年一月十日から十九日までの間、とりわけ一月十三日から十五日の間が最も可能性が高い。おそらくその時、二人の間には激論が交わされ、そのためしばらくの間は交信も途絶えることとなつたものであろう。嘉内が盛岡を訪問しながら賢治を訪ねなかつたのはそのためで、書簡14から考えると四月ごろまで、二人の間には沈黙が続いていたと思われる。

この状況は、従来大正十年七月下旬にあつたと考えられてきた賢治と嘉内の「訣別」の状況に似てはいないか。すなわち、大正十年七月下旬にあつたと考えられてきたような二人の再会と意見の対立が、大正八年一月中旬にもあつたということである。そしてそれらはいずれも「訣別」で終わっているのではなく、冷却期間ともいふべきしばらくの沈黙が続いた後で交友は復活している。

栗原敦氏が詳しく検証している通り、書簡「あなたはむ

かし：」における促音の表記や「な」の字形、用箋、さらにはスクラップブックでの貼り込み位置といった客観的な状況は、すべて大正七年から八年の春頃までという時期を明確に示している。しかし、栗原氏の説が人口に膾炙せず、今なお多くの人々にとつてこの書簡が『新校本宮澤賢治全集』の書簡102aではなく、『校本宮澤賢治全集』の書簡106のままであり続けている理由は、保阪庸夫氏の言葉を借りるならば「心理的必然性」が示されていない点にあるのではないか。いわば102aという位置に消去法的な印象を感じてしまうことに原因があるように感じられる。

さらに手掛りを求めるならば、この書簡の中で何度も繰り返される「この経」という言葉にも注目できる。「この経」とは言うまでもなく法華経のことであるが、法華経そのものに心酔するような個人的な信仰から国柱会の日蓮主義による信仰に移行したと思われる大正九年七月の書簡106以降ではこうした言い方はしないように思われる。たとえば「この経に帰依してください」とは言わず「日蓮大聖人御門下になってください」といった言い方になるのではないか。ところが書簡「あなたはむかし：」の中には「日蓮大聖人」「国柱会」といった言葉は何一つ出てこない。このことは、この書簡が少なくとも賢治が国柱会に関心を持つようになる以前に書かれたことを示していると思われる。

加えて、この書簡の中で賢治が「夏に岩手山に行く途中誓はれた心が今荒び給ふならば」と、大正六年七月に嘉内にも注目できよう。賢治が書簡にこの話を最初に書いたのは大正七年十二月十日頃と推定される書簡94で、その後大正八年八月上旬と推定される書簡103、大正九年五月と推定される書簡104、大正九年七月二十二日と推定される書簡106と続き、それ以降は話題になっていない。とりわけ書簡94にこの話題が長々と記されていることは、書簡「あなたはむかし：」との関連を感じさせる。

このように考えるならば、書簡「あなたはむかし：」は大正八年一月中旬、おそらくは父宛の書簡が中断している一月十四日・十五日あたりに書かれたものと見るのが、最も妥当なのではないか。これを『新校本宮澤賢治全集』の書簡番号にあてはめれば、書簡112aということになる。この位置であれば、栗原氏が指摘する表記や用字などの点でも全く問題なく、保阪嘉内のスクラップブックでの貼り込み位置とも当然一致し、しかも保阪庸夫氏のいう「心理的必然性」も認められようと筆者は考えている。

#### おわりに

本稿で取り上げた書簡「あなたはむかし：」の位置を

ぐつてはいくつかの考え方はあるが、内容的に二人が会って話したが話がかみ合わなかったこと、それについて賢治が自分の思いを切々と述べたものという点では一致している。筆者もまたその点については同感である。問題は、それをいつの時点のことと見做すかということである。

従来の伝記研究では、大正七年三月に保阪嘉内は除名、宮沢賢治は卒業によって両者は離れ離れになり、保阪嘉内の日記に「宮澤賢治／面会来」と記されている大正十年七月十八日まで会うことはなかったとされてきた。こうした見解は、この書簡が大正十年七月に書かれたとする小沢俊郎氏らの説や、大正七年三月に書かれたとする三神敬子氏の説に反映されている。とりわけ小沢氏の説は多くの論者が拠ってきたところであるが、筆者は書簡を再検討することにより大正八年一月に二人は再会していると考え、書簡「あなたはむかし…」はその直後に書かれたものであると推定する。

いずれにしても、この書簡に日付がないことや、二人が再会した確たる証拠がない以上は説の一つという域は出ないが、他の書簡に記された状況から判断して筆者にはこの位置が最もふさわしく感じられるのである。栗原敦氏は「いまは自分の意見は慎んで、これからの追究の深まりに待ちたいと思う」と結ばれたが、本稿もその「追究」の一

つの結果として受け取っていただければ幸いである。

#### 注

- (1) 『新校本宮澤賢治全集』ではその一部をまとめて七二通としている。
- (2) 森荘巳池『宮澤賢治』小学館、一九四三年。
- (3) 境忠一『宮沢賢治と『アザリア』』『有明工業高等専門学校紀要』三号、一九六七年十二月。
- (4) 保阪庸夫『「友への手紙」残照』『賢治研究』七〇号、一九六八年八月。六二頁。
- (5) 保阪庸夫『我が友賢治―遺品は眩く』『宮澤賢治―一通の復命書』市立小樽文学館、一九九七年。一四頁。
- (6) 『校本宮澤賢治全集』五四〇―五四一頁。なお『新校本宮澤賢治全集』の年譜では、栗原敦氏の見解を踏まえ、「書簡196」に関する記述は削除されている。
- (7) 例えば、最近の評伝である山下聖美『新書で入門 宮沢賢治のちから』(新潮新書、二〇〇八年)や第三九回新潮新人賞受賞作である大澤信亮『宮澤賢治の暴力』(「新潮」一〇四巻一―号、二〇〇七年十一月)など。一九九〇年代以降に保阪嘉内を取り上げた著作は、筆者の知る限りいずれも疑問を差し挟むことなく二人の訣別を記している。
- (8) こうした小沢俊郎氏の論拠について、栗原敦氏も「前提とされたこの疑問もまた洗い直す必要がありはしないだろうか」と指摘している(栗原敦「表記と用字、あるいは時期推定書簡存疑―『新校本宮澤賢治全集』書簡集編集作業から―」『宮沢賢治研究 Annual』五号、一九九五年。一五七

頁)。

- (9) 斜線は後日にまとめて引かれたものとも考えられ、「宮澤賢治／面会来」の記述自体も後日に書かれた可能性がある。詳細は、拙稿「宮沢賢治と保阪嘉内の『訣別』をめぐる」(『宮沢賢治研究 Annual』二〇号、二〇一〇年)に記した。
- (10) 菅原千恵子「宮沢賢治の青春」(宝島社、一九九四年)、九  
九―一四頁。
- (11) 注(5)に同じ。
- (12) 保阪庸夫、注(4)前掲書。六二―六三頁。
- (13) 保阪庸夫氏のいう「嘉内の手記」とは、河本緑石らの同人誌「砂丘」二号(砂丘社、一九二二年二月)に保阪嘉内が寄稿した「審判の日よ来れ」と題した散文を指す。保阪氏は、嘉内が文中で「陸中花巻なるM―忍苦の人」と賢治について評しながらも「人は力無くして折伏を撰する事はあまりに僭越至極の事である」とあるのを論拠としている。引用文中には記されていないが、大正十年七・八月の関徳弥宛の賢治の書簡15・19も保阪庸夫氏という「心理的必然性」につながるものといえよう。
- (14) 河本静夫編『アザリアの友へ』(緑石書簡集刊行会、一九九七年)九頁所載。日付はないが保阪庸夫氏は大正七年十月〜十一月頃と推定している。
- (15) 「杜陵はつひに」と題して六首を記している。引用したのはその冒頭歌。十一月二十七日の日付がある。
- (16) 河本静夫編、前掲書。五頁所載。
- (17) 賢治はこの書簡の中で、初めて帝国図書館に行ったことを告げている。賢治の書簡や嘉内の草稿に上野の「博物館」が登場することから考えて、上野で両者が待ち合わせたと

も不思議はない。

- (18) 河本静夫編、前掲書。四〇―四一頁所載。
- (19) 大正八年一月五日、『カルメン』公演中であつた女優の松井須磨子が自殺している。もし賢治が保阪嘉内と一月十日前後に東京で再会したとすれば二人の間でこのことが話題になつた可能性がある。賢治が「春と修羅」に収録した「習作」に、『カルメン』の劇中歌であつた「恋の鳥」(北原白秋作詞・中山晋平作曲)の詩句を一部変えたものが挿入されているが、保阪嘉内もこの詩句を取り入れた歌曲を自作して歌っていたことから、東京で『カルメン』について話したことが二人の思い出の一つであつた可能性はある。なお、保阪家では嘉内の作つたこの歌を家庭歌として今も歌い継いでいる。
- (20) 栗原敦、注(8)前掲書。一六三頁。